

7 春が来た

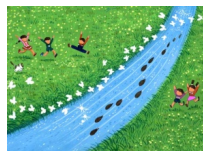
1910年(明治43年)
作詞：高野 辰之
作曲：岡野 貞一



1. 春が来た 春が来た どこに来た
山に来た 里に来た 野にも来た
2. 花がさく 花がさく どこに咲く
山にさく 里にさく 野にも咲く
3. 鳥がなく 鳥がなく どこでなく
山でなく 里でなく 野でもなく

8 春の小川

1912年(大正元年)
作詞：高野 辰之
作曲：岡野 貞一



1. 春の小川は さらさら行(い)くよ
岸(し)すみれや れんげの花に
すがたやさしく 色うつしく
咲けよ咲けよと ささやきながら
2. 春の小川は さらさら行(い)くよ
えびやめだかや こぶなのむれに
今日も一日 ひなたでおよぎ
遊べ遊べと ささやきながら

9 故郷 (ふるさと)

1914年(大正3年)
作詞：高野 辰之
作曲：岡野 貞一



1. 兎(うさぎ)追いし かの山
小鮒(こぶな)釣(つ)りし かの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき ふるさと
2. 如何(いか)にいます 父母
恙(つつが)なしや友垣(ともがき)
雨に風につけても
思いいずる ふるさと
3. 志(こころざし)を 果(は)たして
いつの日にか 帰らん
山はあおき ふるさと
水は清(きよ)き ふるさと

10 紅葉 (もみじ)

1911年(明治44年)
作詞：高野 辰之
作曲：岡野 貞一



1. 秋の夕日に照(て)る山もみじ
濃(こ)いも薄いも数ある中に
松をいろどる楓(かえで)や蔦(つた)は
山のふもとの裾模様(すそもよう)
2. 溪(たに)の流(ながれ)に
散り浮(う)くもみじ
波にゆられて はなれて寄って
赤や黄色の色さまざまに
水の上にも織(お)る錦(にしき)

11 赤とんぼ

1927年(昭和2年)
作詞：三木 露風(ろふう)
作曲：山田 耕作



三木 露風 (みき ろふう)

1889年(明治22年)6月23日 - 1964年(昭和39年)12月29日)は日本の詩人、童謡作家、歌人、随筆家。本名は三木 操(みき みさお)。近代日本を代表する詩人・作詞家として、北原白秋と並び「白露時代」と称された。若き日は日本における象徴派詩人でもあった。

小・中学生時代から詩や俳句・短歌を新聞や雑誌に寄稿、17歳で処女詩集を、20歳で代表作の『廃園』を出版するなど早熟の天才であり、北原白秋とともに注目された。5歳の時に両親が離婚。

赤とんぼを「負われて見た」子供は誰の背に負われていたのでしょうか。素直に考えれば3番の歌詞に出てくる15歳で嫁に行った「姐や」。明治時代、雇われ先で子守りをした姐や達はあどけなさが残る少女だったことでしょう。

しかし、この歌が懐かしむ背中が姐やではなく母親のそれだという見方がかつては強かったのです。4番まである詞のどこにも「母」は登場しません。作詞者三木の生い立ちにはその声に同意したくなる要素が確かにあるのです。露風が5歳の時、両親は離婚しました。その後大人になって北海道で洗礼を受けるのですが、その時函館のトリス修道院で窓の外に赤とんぼを見、幼い自分を背負ってくれていた子守娘のことを思い出して、この詩を作ったといえます。32歳(大正八年)の作品でした。

時代の流れのなか、昭和22年文部省教科書に所載の折は、3番の歌詞は抜いて載っていたというエピソードもあります。曲の情感に加えて、詞の「とまっているよ 竿の先」に潜んでいる寂しい思い。これがこの歌の真価のようです。

【トリス修道院とは】
三木露風は1916年(大正5年)から

1924年(大正13年)まで北海道磯町(かみいそちょう)(現・北斗市)のトリス修道院で文学講師を務めた。1922年にここで洗礼を受け、カソリッククリスチャンになった。

【補足説明】

姐やとは当時、女中さんとよばれた子守奉公の女の子のことである。⇒姐(ネエヤ)とは、昭和初期ころまではいましたが、今はもうほとんど見当たりません。

昔の日本では家事全般を面倒見る「女中さん」という名称で呼ばれた女性がいました。この女性は主に東京などの大都市ではなく、地方の県から出てきた人たちで、殆どが小学校や中学校を卒業したばかりの「女の子」だったのです。

その「女中さん」と呼ばれた「女の子」が雇われた家に、育児期の子供がいる場合は、おむつを替えたり、おっぱいをあげたり、食事を食べさせたり、おんぶして寝かしつけたりする子守りなどもしてもらい、その家ではその女性を「姐」と呼んだのです。

⇒「姐」は先ほど書きましたように、遠い地方から東京などに出てきた「女の子」だったため、「姐」のご両親などから時どき手紙や、仕送り(お小遣い)などが届くのです。

⇒その「姐」もだんだん大人になり、好きな人が出来たりご両親からの勧めで結婚することになると、「女中さん」として勤める事が出来なくなり、その家からお暇をもらう(辞める)ことになるのです。この「姐」の場合は15歳でお嫁に行くことになったのですね。

⇒その「姐」の出身地の事を「お里」と呼び、ご両親などからの手紙を「お里の便り」と言い、お嫁にいったその家にはいなくなったために「お里からの便りが、その家には来なくなったこと」を「絶えてた」と言ったのです。

【最期】

1964年12月21日午前9時15分頃、三鷹市下連雀郵便局から出てきたところを、タクシーにはなられ、同月29日午後3時35分頃に脳内出血により75歳で死去。1928年より在住した東京都三鷹市に墓がある。

【墓の所在地】

〒181-0000 むね
東京都三鷹市牟礼2-14-16
大盛寺別院墓地内
TEL：0422-47-6797